

日本植物分類学会 ニュースレター

No. 13

May 2004

目 次

諸報告

日本植物分類学会2004年度第1回評議員会議事抄録.....	2
日本植物分類学会第3回大会総会議事抄録.....	3
2003年度事業報告と2004年度事業計画について.....	5
細則の変更について.....	5
古生物研連報告.....	5
自然史学会連合報告.....	8
平成15年度絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会活動報告報告.....	9
お知らせ	
平成16(2004)年度野外研修会のお知らせ.....	11
日本植物分類学会2005年度大会について.....	12
学会賞等検討委員会の設置について.....	12
会費納入と自動振替利用のお願い.....	13
アジアの植物多様性と分類に関する国際シンポジウム.....	14
ミニ特集：植物同好会のこれから	
植物同好会の活性化は可能か？.....	17
地方植物研究会・同好会の抱える問題を考える.....	18
連絡員からときどき便り	
藻(も)便り・2・.....	21
蓼食う虫便り・2・.....	22
会員消息.....	24

諸報告

日本植物分類学会 2004 年度第 1 回評議員会議事録抄録

庶務幹事 遊川知久

日時：2004 年 3 月 13 日 17:30 ~ 19:30

会場：広島大学大学院理学研究科 E 棟 202 講義室

参加者：

評議員：() 内は被委任者 評議員出席 7、委任状出席 5

出席(7)：秋山弘之、西田治文、原田浩、田村実、角野康郎、伊藤元己、北川尚史

欠席(5)：今市涼子(北川尚史)、堀口健雄(加藤雅啓)、邑田仁(原田浩)、高橋英樹(加藤雅啓)、永益英敏(秋山弘之)

幹事会等：() 内は役職

出席(9)：加藤(会長)、遊川(庶務)、横山(会計)、岡田(編集委員長)、布施(図書)、藤井(ホームページ)、秋山(和文誌編集責任者)、西田佐知子(ニュースレター担当)、西田治文(自然史学会連合)

欠席(6)：矢原(絶滅危惧植物第一委員会委員長)、柏谷(絶滅危惧植物第二委員会委員長)、大橋(国際植物命名規約邦訳委員会委員長)、岩槻(IAPT2004 シンポジウム準備委員会委員長)、綿野(植物分類学会連合連絡会、日本分類学会連合)、福岡(講演会)

1. 評議員会開催にあたり、加藤会長から挨拶があった。
2. 遊川庶務幹事により、定足数が確認された。評議員出席 7、会長 1、委任状出席 5 で本評議員会は成立した。
3. 評議員会議長として原田氏が選出された。
4. 議事録署名人として伊藤氏と西田氏が選出された。
5. 報告事項
各担当幹事・役員から、以下の項目について説明がなされた。
 - 5.1 会務報告
2003 年度の事業報告、会員数、その他について。
 - 5.2 会計報告
2003 年度の会計報告、会費徴収について。
 - 5.3 学会誌に関する報告
英文誌、和文誌の編集状況について。
 - 5.4 ニュースレターに関する報告
ニュースレターの発行状況と印刷等の予算について。
 - 5.5 図書関連報告
印刷物の発行状況、交換・寄贈状況について。
 - 5.6 植物分類学関連学会連絡会報告
 - 5.7 日本分類学会連合報告
 - 5.8 ホームページ関連報告
 - 5.9 講演会報告
 - 5.10 自然史学会連合関連報告
 - 5.11 各種委員会に関する報告
・学会賞選考委員会

第3回日本植物分類学会賞の選考と今後の方針について。

- ・植物データベース専門委員会
日本国内のタイプ標本の電子化について。
- ・IAPT シンポジウム 2004 準備委員会
- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会
環境省版レッドデータブックの改訂作業について。
- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会
検討委員会の開催と活動予定について。
- ・国際植物命名規約邦訳委員会
国際植物命名規約邦訳本の出版と販売について

6. 審議事項

6.1 2003年度事業報告(案)について

遊川庶務幹事より説明がなされた。審議の結果、2003年度事業報告(案)が承認された。

6.2 2003年度決算報告(案)について

横山会計幹事より説明がなされた。審議の結果、2003年度決算報告(案)が承認された。

6.3 2004年度事業計画(案)について

遊川庶務幹事より説明がなされた。審議の結果、2004年度事業計画(案)が承認された。

6.4 2004年度予算(案)について

横山会計幹事より説明がなされた。特別会計からはIAPT2004の経費として50万円が計上されている。審議の結果、2004年度予算(案)が承認された。

6.5 次期監事候補の推薦について

現在の会則では監事の選出が会長選挙前に行われるため、監事に選出された会員は会長候補となることのできない問題があるとの説明が、加藤会長からあった。したがって次期監事選出を会長選挙後の次の総会まで延期することが提案され、了承された。

6.6 学会賞等検討委員会設置について

学会賞の顕彰方法や選考内規等を検討する委員会の設置が加藤会長から提案され、了承された。

6.7 第4回大会開催地について

2005年3月に高知県立牧野植物園で行うことが決定した。

日本植物分類学会第3回大会総会議事録抄録

庶務幹事 遊川知久

日時：2004年3月14日 11:30-12:30

場所：広島大学大学院理学研究科 E棟 102 講義室

1. 総会に先立ち加藤会長から挨拶があった。
2. 原田浩氏が議長に選出された。

3. 報告事項

3-1 会務報告

前年度の事業報告と決算報告が、遊川庶務幹事と横山会計幹事よりそれぞれ行われた。

3-2 逝去された学会員に対して黙禱

2003年に逝去された学会員に対して黙禱が行われた。

3-3 各委員会からの報告

・APG 編集委員会

岡田編集委員長により前年度と現時点のAPGの編集状況が報告された。

・ニュースレター

西田担当幹事から若手研究者の育成やプロとアマの接点についての特集を組みたいので、そのことについて書いてくれそうな方を自薦他薦してほしいとの依頼があった。

・学会賞選考委員会

角野委員長より、第3回日本植物分類学会賞は村田源氏と村上哲明氏に決定したことが報告された。

・IAPTシンポジウム2004準備委員会

加藤会長より準備状況が報告された。

・絶滅危惧植物第一委員会

矢原委員長より絶滅危惧植物第一委員会の前年度の活動報告がなされた。また4月からは囑託研究員によるレッドデータリストの見直し、シカによる食害調査を行う予定であることなどが報告された。

・国際植物命名規約邦訳委員会

遊川庶務幹事より「国際植物命名規約2000日本語版」完売の報告があった。増刷には多くの経費が必要であること、来年には新しい規約に改訂されることなどから、執行部としては増刷しない方向で進めたいとの説明があった。

4. 審議事項

第一号議案 2003年度事業報告書並びに2004年度事業計画案承認の件

遊川庶務幹事から上記2件について説明があった。特にIAPT2004シンポジウムとAPGの年3回発行の周知が要請された。さらにAPGの件について、岡田編集委員長より補足説明があった。発行回数を増やす理由として、今後論文発表までの迅速性が重要であることなどが説明された。審議の結果、異議無く承認された。

第二号議案 2003年度決算報告書並びに2004年度予算案承認の件

横山会計幹事から上記2件について説明があった。また高橋監事による会計監査報告書が読み上げられた。審議の結果、異議無く承認された。

第三号議案 評議員選挙における同数得票者の措置

遊川庶務幹事より、評議員選挙における同数得票者の措置に関する細則変更が諮られ、審議の結果、異議無く承認された。

第四号議案 次期監事選出

加藤会長より、現在の会則では監事の選出が会長選挙前に行われるため、監事に選出された会員は会長候補となることができない問題があるとの説明があった。したがって次期監事選出を会長選挙後の次の総会まで延期すること、監事の任期について会則変更を検討し次の総会で諮

ることが提案され、審議の結果、異議無く承認された。

5. 次期会長・評議員選挙における選挙管理委員会について

遊川庶務幹事より次期会長・評議員選挙の選挙管理委員長として樋口正信氏（国立科博）に依頼したことが報告された。

6. 2005年度大会について

遊川庶務幹事より、次回大会が高知県立牧野植物園において開催されることが報告され、大会準備委員会を代表して田中伸幸氏から挨拶があった。

2003年度事業報告と2004年度事業計画について

庶務幹事 遊川知久

上述のように、ニュースレターNo.12に掲載いたしました案が、総会と評議員会で承認されました。詳細はニュースレターNo.12の7、9ページをごらんください。

細則の変更について

庶務幹事 遊川知久

上述のように、総会と評議員会で細則の変更が承認されましたので、お知らせいたします。

評議員選挙についての細則変更

第4条 評議員は、会員の郵送投票により得票数順に上位8名を選出する。複数の候補者が同数票を獲得したため上位8名を決定できない場合は、最下位同数得票者について抽選を行い、上位得票者とあわせて8名を選出する。選出された評議員により約4名の評議員を、得票数を参考に、分類群、地区の均整などを考慮して追加指名する。

附則 本細則は2004年3月14日より実施する。

古生物研連報告

古生物研連委員 鈴木三男

昨年秋から西田治文氏の後を継いで第19期の日本学術会議古生物研連を担当することとなった。この間、昨年12月5日と今年3月8日の2回、研連が開催され、議事録が出されたのでそれを報告する（第2回は未だ承認を受けていないので案の段階）。

主要な話題は学術会議の制度変更に伴うもので、第19期の会員及び研連委員は新たな制度に基づく学術会議の発足までの1年半ないし2年である。第2回の会議のメインは科学研究費の「層位・古生物」の第1段審査員候補の「情報提供リスト」の作成であったが、議事録（案）にあるとおり3学会から推薦された15名について投票を行い、順位を付けて決定し、学術会議に提出した。

（次ページに続く）

第19期日本学術会議古生物学研究連絡委員会第1回議事録

日時：2003年12月5日（金） 10:30～13:00

場所：日本学術会議6階 第4部会議室

出席：小松正幸会員、小笠原憲四郎、八尾昭、加瀬友喜、辻誠一郎、小澤智生、山口寿之、
北里洋、大路樹生 各委員

欠席：鈴木三男 委員

学術課：宮野厚子 事務官

議 題

1. 前回議事録の承認

第18期第9回議事録案が示され、承認された。

2. 委員長、幹事の選出

委員長に小笠原委員、幹事に北里、大路各委員が選出された。

3. 学術会議報告（小松）

- 1) 7月22日 - 24日に第19期第1回総会が行われ、会長に黒川清氏（第7部）、副会長に戒能通厚（第2部）岸輝雄氏（第5部）が選出された。また、第4部長に郷信広氏が選出された。学術会議の改革案が吉川前会長および黒川会長から紹介された。改革案では、新たな学術会議は人文社会系、生物生命系、理工系の3分野に分かれ、学術会議会員（210名）は70歳定年で任期6年（3年ごとに半数改選）、従来の研連委員に相当する連携会員（2370人）は任期3年で、会員・連携会員とも会員が選出する。ただし、初回は特別の委員会を設ける。この案は国会での承認が得られ次第、実行に移されることになるので、今期は1年半ないし2年の任期となる。
- 2) 10月30日の総会で第19期活動計画が示された。第4部では、基礎科学の重要性を訴えることを1つの活動目標とすることが紹介された。

4. 第18期の活動内容、および第19期への申し送り事項

第18期では、以下の活動が行われたことが紹介された。

- 1) 古生物タイプ標本に関する調査が行われた。その結果はタイプ標本データベース第1巻、第2巻として出版され、第3巻が印刷中である。
- 2) 対外報告書「古生物学の現状と将来」は運営協議会で了承を得た後、印刷公表した。
- 3) 地方博物館で学位を有する研究者の地位向上、科研費申請資格の獲得へ向けた努力。
一方、第18期からの申し送り事項が紹介され、第19期の活動方針として以下の項目が議論された。
 - 1) 教育機関に所属する若手研究者のポスト減少の問題、地方博物館の研究者の地位向上
 - 2) タイプ標本の現状の危機的状況の打開に向けた方策
 - 3) 古生物学の啓蒙活動、社会との接点、アウトリーチ
特に1ではサイエンス自体に若手を引きつける魅力ある進展が望まれる一方、新しい制度の中での政策的なロジスティクスを考える必要性、2では地方大学等、今後標本管理に不安のある機関の標本を中核機関、博物館等に移す方策、3では定常的な研究以外にトピック的な研究や特定領域の研究を立ち上げていく必要性が議論された。

5. 科研費審査委員の選出に関する問題

平成17年度より従来の方式が変更となり、学術会議のリストアップした審査委員を学術振興会は推薦ではなく参考資料として取り扱うこととなった。つまり今後必ずしも学術会議の意向が人選に反映されなくなる可能性がある。しかし平成17年度の審査委員の推薦はあくまでも従来通りの方式で行われることが確認された。

科研費細目に対応する研連の見直し、推薦作業に対する意見聴取、細目のキーワードの見直しに関する回答が求められており、必要ならば早急な返答が必要となる。

6. 国際会議への代表派遣推薦

国際会議への平成16年度代表として、山口委員（第19回国際動物学会、北京へ）の派遣を推薦することが承認された。

第19期日本学術会議古生物学研究連絡委員会第2回議事録（案）

日時：2004年3月8日（月） 10:30～13:00

場所：日本学術会議6階 第4部会議室

出席：小松正幸会員、小笠原憲四郎、小澤智生、加瀬友喜、河村善也、鈴木三男、辻誠一郎、八尾昭、山口寿之、北里洋、大路樹生 各委員

欠席：なし

学術課：宮野厚子 事務官

議 題

1. 前回議事録の承認

第19期第1回議事録案が示され、一部文言を修正し承認された。なお、出席者リストに河村善也委員の名前が脱落していたため、追加した。

2. 学術会議報告（小松会員）

3) 2月16・17日（月・火）に第19期連合部会、第四部部会が開催され、日本学術会議法の一部を改正する法律案が示された。会員制度の改革、内部組織の改革、内閣府への移管、施行日から成る。新たな学術会議は210名の会員からなり、任期は6年である。ただし、会議としての継続性を確保するために、改選は半数ずつ3年ごとに行う。70歳定年制が導入される。現行の7部は、人文科学、生命科学および理学および工学の3部に改組される。従来の研連は廃止し、緊急の課題や新たな課題を調査審議する連携会員（約2500名）が新設される。従来、総務庁管轄であった日本学術会議は、内閣府に移管し、総合科学技術会議と対となって日本の科学技術の推進に寄与するように位置づけられる。本法律は平成17年10月1日に施行される予定である。したがって、第19期学術会議は約2年間の短期的な活動となる。

4) 日本学術会議のこの後の活動について（案）が示された。基本理念、アクションプラン、国民に対するアピール活動の実行の3つの柱について書かれている。運営の基本点の転換が諮られ、会員学協会に向けた内向きの活動から、政府や国民そして外国との連携を目指す外向きの活動を目指すようになる。そのためには、目に見える活動案（アクションプラン）が必要になり、たとえば次期科学技術基本計画に対する提言をまとめる行動を始める。また、学術会議の

活動を国民に周知する目的で、シンポジウム、講演会を頻繁に開く。などが提案されている。なお、第4部のアクションプランとしては、特別委員会で議論している「若者の理科離れ問題」および「基礎科学振興」を柱にして活動を進めるとの方針が説明された。

3. 日本学術振興会への科研費審査委員候補者に関する情報提供

日本古生物学会、日本地質学会、日本第四紀学会から推薦された15名の候補者について、業績・細目キーワードなどを考慮して研連委員による投票を行い、得票数上位9名を細目層位・古生物一段審査委員候補者として選んだ。候補者を得票数の多い順に並べた上で、日本学術振興会に情報提供を行うこととした。なお、分科地球惑星科学二段委員については、関連学協会からの推薦を受けて学術会議会員が順位をつけ、日本学術振興会に情報提供を行う予定である。

4. 第19期の活動内容に関する具体案の議論

- 1) 教育機関に所属する若手研究者枠の問題と地方博物館研究者の科研費申請等にむけた取り組みについて議論した。地方博物館研究者の科研費申請については、自然史学会連合と連携して引き続き活動を行うが、行政組織における位置づけなどの地方博物館が抱えている根本的な問題については、研連が問題点を整理・指摘することを目指す。
- 2) タイプ標本の現状の危機的状況の打開に向けた方策について、意見交換を行った。各大学・研究機関等におけるタイプ標本の現状と打開策については、次回具体的に検討することとした。なお、タイプ標本データベースは日本古生物学会特別号39、40、41号に出版されたが、積み残し分約60ページを同42号として追加出版することが紹介された。
- 3) 古生物学の啓蒙活動、社会との接点、アウトリーチについて、意見を交換した。沿岸環境の擾乱に対するアセスメントの可能性を探るシンポジウムを研連が関連研連と共催して、古生物学の社会貢献についてアピールするのはどうかという提案があり、次回までに具体案を作成し、内容を検討することとした。なお、ユネスコ主導で International Year of Planet Earth が2006年に行われることに呼応して、地質研連では「地球科学は人間活動にいかに役立っているのか？」をテーマにしたキャンペーンを前後1年を含めた3年計画で行う予定があるとの話が小松会員から紹介された。古生物研連にも連携の誘いがある。

5. その他

- ・学術会議第142回総会への報告あるいは提案があれば申し出る。
- ・第四紀学会からのキーワードの追加（第四紀あるいは第四紀学）の依頼があった。

自然史学会連合報告

担当委員 西田治文

2003年11月29日(土)に、国立科学博物館新宿分館において2003年度総会とシンポジウムが開催された。

・2003年度は、連合シンポジウム(総会後に開催)を企画したほか、6月に仙台で日本霊長類学会との共催シンポジウムが開催され、約60名の参加者があった。また、新たに自然史系博物館部

会が発足し、今後、博物館のあるべき姿、エドゥケーター導入の推進など自然史系博物館の理想像を検討したり、関係機関に提言をすることになった。従来から継続していた地域教育アクションプランは、2003年度も「自然史教育展開プログラム」を継続し、11月に千葉市の中学校理科教員を対象に古生物学関連の講習会を行った。しかし、同様の企画が多面で増加しているため、自然史学会連合としては自然史系博物館部会などの活動に重点をおくこととなる。

・2004-2005年連合代表選挙が行われ、鎮西清高氏が選出された。また、2004-2005年運営委員には伊藤元己、森田利仁、野村周平、篠原現人、海部陽介、出川洋介の6名が候補として推薦され、承認された。また、2004年2月20日(金)に開催された新委員会において、会則に基づく連合代表指名委員として、佐々木猛智、西田治文が指名され、就任した。

・2003年11月29日付で新たに日本陸水学会、日本進化学会、植生学会の3学会の新規加盟が承認された(計37学協会)。

・新課程導入にともない、「生物II」では進化と生態の両分野が選択性となり、大学生の知識が偏る可能性がある。このため、2006年度からの生物II入試出題にあたっては、進化と生態の両方を出题範囲とするよう関連大学に要望することとし、12月5日付で各大学長宛、要望書を送付した。

・高校教科書の自然史関連の内容が大幅に削減されている現状が報告され、連合として何らかの対策を検討することになった。

・日本の科学技術政策、理科離れ問題、日本学術会議の動向等、自然史科学をとりまく社会情勢の変化に対して常に注意を払い、必要に応じて連合が適切な行動を起こすべきであるとの意見が出された。

・2003年度運営委員の遠藤により博物館問題についての提言がまとめられ、日本学術会議の対外報告書「博物館の高度化へ向けて」として公表された。今後も学術会議を通じた博物館関連の活動を継続することが報告された。

・2004年の総会・シンポジウムは、12月4日(土)に開催する予定である。シンポジウムのタイトルは「日本の自然史-多様な生物たちのエピソード-」、講演予定者は4名である。本シンポジウムの開催に関して科研費を申請済である。

平成15年度絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会活動報告

委員長 柏谷博之

委員の構成は次の通りです。

柏谷博之(委員長)、井上正鉄、岩月善之助、神田啓史、千原光雄、出川洋介、土居祥兌、中西稔、服部力、吹春俊光、古木達郎、渡辺信

平成15年度では、平成15年12月15日に環境省において植物第二委員会が取り扱う蘚苔類、地衣類、藻類、菌類に関する検討委員会を実施した。この会議では、各専門分野から今後の活動方針の素案を提出していただき、活動計画が紹介されたあと、基本的な評価方法、見直し作業の手順とスケジュール、作業結果の公表などについて討議を行った。

見直し作業の進め方については、それぞれの分類群ごとに活動の詳細には若干の差異が見られ

るが、基本的には見直し作業に積極的に協力することで意見が一致した。また、この事業に関しては必要経費の出所や金額が明示されていないため、関連機関の環境省に早急に対処してもらえらるるよう強い要望が出された。

分野ごとに示された調査内容の概要（予定）は、下記のようなものである。

（藻類）

RDB2000掲載の藻類71種について、前回と同様の調査を実施し、それぞれの分類群について1997年に環境省が策定したカテゴリーの要件を検討する。新たに追加すべき分類群が存在するので、それらについてもカテゴリーの要件を調査し、検討する。調査の規模は委員4名、協力員14名の計18名を予定している。

（地衣類）

RDBリストされた種の追加・現況調査を行う。特に前回の調査で準絶滅種、情報不足とされた種について重点的な調査を行い、ランクを再検討する。最近の分類学的研究の進展により、固着地衣類を中心にモノグラフ的研究が修了した分類群についても、大型地衣類同様の評価を行い、絶滅危惧種の候補とそのランクを追加検討する。また、近年、普通種と考えられていた種（例えばサルオガセ）のように日本各地から急速に姿を消しつつある種もあり、絶滅危惧種の候補種を見直し作業を行う。調査に関しては地衣類研究会の協力を得て現地調査や情報収集を行う。

（蘚苔植物）

レッドデータブックにリストされたセン類およびタイ類の種の分布について、日本各地で調査を行い、さらに多くの資料を集める。特に前回の調査で、準絶滅危惧種、および情報不足とされた種を重点的に調査し、十分な情報を得た上でランクを決定する。タイ類のうち、樹木着生種の評価が前回の調査では充分でなかった。今回は樹木着生種および生葉上苔類を絶滅危惧の観点から再評価したい。このことに関連して、絶滅危惧種のランクを決定するための基準を再検討する。

前回同様に日本蘚苔類学会会員の皆様の協力を得て、日本各地で絶滅危惧種の調査を行う。調査結果は随時蘚苔類研究（旧名：日本蘚苔類学会会報）に報告する。

（菌類）

小笠原初等、南西諸島、東北ブナ林、九州暖温帯原生林、海岸、関西～中国アカマツ林（マツ枯れ被害の影響）その他、特筆すべき種のモニタリング調査を実施する。調査はそれぞれの地域に近い方々の協力を得つつ効率的に進める。小笠原、南西諸島等については絶滅危惧種が多いこと、地域にほとんど協力者がいないことから、改めて集中的な調査が必要であると考えている。

お知らせ

平成16年(2004)度野外研修会のお知らせ

吉田國二(名古屋市) 須賀瑛文(岐阜県可児市)

愛知県、岐阜県の溜め池周囲と湿地の植物(秋の周伊勢湾要素植物など)

平成8年(1996)初夏、恵那山を中心にして、この学会の前身の一つである植物分類地理学会の野外研修会をお世話させていただきました。今回は「愛知県、岐阜県の溜め池周囲と湿地の秋の植物」を見て頂こうと思います。

農業の衰退とともに、稲作の水源としての溜め池は減少しておりますが、さらに、最近は大規模の改修工事やら、河川からの導水によって、生物の多様性が失われております。溜め池は夏の水の需要期で周囲が干上がって、秋にかけてはカヤツリグサ科、イネ科、ホシクサ科などの一年生草本が生えますが、当地方では全国的には少ないとされている、トネテンツキ、コアゼテンツキ、ヌマカゼクサなどが見られます。又、伊勢湾を取り囲む地域では、溜め池の水源が湿地であるところが多く見られます。特に今回御案内する岐阜県土岐、恵那郡いわゆる東濃地方には嘗ては大小の湿地が無数にありましたが、大きなものは溜め池を含めゴルフ場(2万5千分の1地形図に6-7ヶ所)、工業団地、住宅団地になって、多くの生物種とともに消失しました。それでも残ったところでは周伊勢湾要素植物の代表であるシラタマホシクサをはじめホシクサ類、ミカワシオガマ、果実のついたシデコブシ、ヘビノボラズ、ミヤマウメモドキ、サクラバハノキ、乾燥した山原のウンヌケ、ウンヌケモドキの生育状態、湿った谷間のハナノキ、ヒトツバタゴなども見て頂けることと思います。

期日と日程： 2004年9月18日(土) - 20日(月、祝)

第一日(18日): 午後 名古屋鉄道犬山線「犬山」駅東口集合

天然記念物「ヒトツバタゴ自生地」を経て 入鹿池周囲観察
愛知県市町村職員共済組合保養所「レイクサイド入鹿」宿泊
(室内研修会および懇親会)

第二日(19日): 愛知県から岐阜県東濃地方の溜め池、湿地を数ヶ所観察

国民宿舎「恵那山荘」宿泊 (室内研修会及び懇親会)

第三日(20日): 根ノ上高原の湿地観察(昼食「恵那山荘」)

午後 JR中央線 美濃坂本駅または恵那駅にて解散

室内研修講演(予定): 岐阜大学 高橋弘先生

溜め池の自然研究会会長 浜島繁隆先生

参加費用: 25,000円 (2泊各3食、懇親会、貸し切りバス代を含む)

* 御参加の人数などによって多少の変更があります

申し込み：〒464-0850 名古屋市千種区今池5-2-4 丸大ビル 2F

吉田 國二 宛 (Tel, Fax. 052 - 733 - 5512)

ハガキまたはFaxで 氏名 連絡先(〒・住所) Tel, Fax バス利用か自家用車か(後者の場合、同乗者の名も)明記の上、お申し込み下さい。尚、宿泊の都合上、お申し込み順に30名に限らせて頂きます。

お申し込み頂いた方には追って御案内を差し上げます。自家用車でお出掛けの方には観察地への移動、駐車などに手間取って、観察時間が少なくなるかも知れません。その点は悪しからず(能率をよくし、大勢の方々に観察時間を出来るだけ多くとって頂くために)。

日本植物分類学会 2005 年度大会について

庶務幹事 遊川知久

2005 年度大会の日程と準備委員の構成をお知らせいたします。

開催地：高知県立牧野植物園

日程：2005 年 3 月 11 日(金)～13 日(日)

大会準備委員長 小山鐵夫(高知県立牧野植物園・園長)

大会副委員長 田中伸幸(同園・標本室長)

庶務幹事 藤川和美(同園・研究員)・小林史郎(同園・客員研究員)

監事 小山鐵夫(同園・園長)

広報委員 黒岩宣仁(同園・栽培技術課)・夏井操(同園・学芸員)

希望者にはオプションツアーを企画中で、14日(月)に蛇紋岩地域にエクスカージョンを行うということで調整しているとのことです。

学会賞等検討委員会の設置について

庶務幹事 遊川知久

学会賞の顕彰方法や選考内規等を検討する学会賞等検討委員会が発足しましたので、メンバーをお知らせいたします。

角野康郎(委員長)、今市涼子、岡田博、加藤雅啓、北川尚史、永益英敏、邑田仁、遊川知久

会費納入と自動振替利用のお願い

会計幹事 横山潤

本学会の会費は前納制で、一般会員 5,000 円、学生会員 3,000 円、団体会員 8,000 円です。納入状況はニュースレター送付の際の宛名書きの右下に「納済会費：数字」という形で示してあります（自動振替制度をご利用の方は、数字の代わりに「自動振替」と記入されています）。この数字が 2004 未満の方は、以下の郵便振替口座にお早めに納入いただきますよう、よろしくお願い致します。

口座番号：00120 - 9 - 41247

名 義：日本植物分類学会

ご承知のように会費納入に自動振替をご利用頂けるようになっております。会計事務削減のため、なるべく本制度をご利用頂きますよう、よろしくお願い致します。ご希望の方は、自動振替依頼書にご記入・ご捺印の上、随時会計幹事にお送り下さい（ただし 2004 年度の会費引き落とし手続きは終了しておりますので、ご利用は 2005 年度からになります）。依頼書をご希望の方は会計幹事までお問い合わせ下さい。

その他、会費納入に関するご質問、納入状況のご照会など、随時承っておりますので、お気軽にお知らせ下さい。会計幹事の連絡先は、ニュースレター巻末をご参照下さい（会計幹事のメールアドレスが変わりましたので、ご注意下さい）。

現在 150 名以上の会員が 1 年分、さらにそのうちの 80 名以上の会員が 2 年分の会費をお納めいただけていません。この分だけで 100 万円以上の減収になっております。上記納入年度をご確認の上、速やかな未納分の解消にご協力下さいますよう、お願いいたします。3 年以上の長期滞納会員に対しましては、次号よりの学会誌等の発送を停止させていただきますので、ご承知おき下さい。

ホームページ、もうみましたか？

日本植物分類学会ではホームページを設けています。Flora of Japan の内容公開、シンポジウムの案内をはじめ、耳寄りな情報やリンクも充実しています。ぜひ一度ご覧下さい。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsps/>

アジアの植物多様性と分類に関する国際シンポジウム

国際植物分類学会 (IAPT) 等と共催のシンポジウムも、いよいよ本番が近づいてきました。発表言語は英語ですが、著名な研究者の講演が聴ける滅多にないチャンスです。ポスター発表の申込は締め切られましたが、参加申込はまだ受け付けています。ふるってご参加下さい。(編集部)

会期：2004年7月29日(木)～8月1日(日)

シンポジウムエキスカージョン：8月2日(月)日光方面

会場 国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市城内町117)

主催：日本植物分類学会, 国際植物分類学会 (IAPT), 国立歴史民俗博物館, 種生物学会, 日本藻類学会

後援：日本分類学会連合

内容

7月29日(木):

公開シンポジウム・辻誠一郎(国立歴史民俗博物館)「海を渡った華花」

7月30日(金):

基調講演

Ge Sun (孫革; 吉林大学): Early angiosperms and their developmental stages in Northeast China (東北中国の初期被子植物と発生段階)

長谷部光泰(基礎生物学研究所): Molecular mechanisms of vegetative and reproductive organ evolution in land plants (陸上植物の栄養器官および生殖器官の進化の分子メカニズム)

Tod Stuessy (University of Vienna, Austria): Contrasting patterns of evolution of plants in oceanic islands (大洋島における植物進化のパターン比較)

シンポジウム 1. 系統地理：生物地理への分子学的アプローチ(担当：梶田忠・瀬戸口浩彰)

1) Qiu-Yun, Xian (North Carolina State Univ., USA): Integrating phylogeny, fossil, and molecular dating in disjunct biogeography - determining migration route and time and unraveling post-isolation evolution

2) Tzen-Yuh, Chiang (Cheng-Kung Univ., Taiwan): Phylogeography of *Fatsia* (Araliaceae) based on nucleotide diversity of trnD-trnT intergenic spacer and nuclear ribosomal ITS region

3) Noriyuki Fujii (Tokyo Metropolitan Univ., Japan): Phylogeography of Japan: alpine plants and widely distributed plants in Japan

4) Yoshihiko Tsumura (Forest Research Institute, Japan): Molecular population genetics and phylogeography of Japanese conifers

ポスターセッション

7月31日(土)

シンポジウム 2. アジアの植物多様性と植物相の研究(担当：秋山弘之・邑田仁・Jae-Hong Pak)

1) Chong-Wook Park (Seoul National University, Korea): Recent progress in the floristic research in Korea

2) Jinshuang Ma (Brooklyn Botanical Garden, USA): Recent progress in the floristic research in China

3) Nobuyuki Tanaka (Makino Botanical Garden, Japan): Plant Inventory Research: Contribution to the Flora of Myanmar

- 4) Monica Suleiman (Saba University, Malaysia): Moss flora of Saba
- 5) Shoko Sakai (Kyoto Univ., Japan): Pollination diversity in Asian tropics
- 6) Bob Morley: Tertiary evolution of the East Asian megathermal flora in relation to tectonics and global climate change

シンポジウム3 . アジアの植物の分子系統 (担当: 田村実・野崎久義)

- 0) Minoru N. Tamura (Osaka City Univ., Japan): Introduction to Symposium 3, "Molecular phylogeny of Asian plants"
- 1) Hisayoshi Nozaki (Univ. of Tokyo, Japan): Origin and evolution of "plants" as deduced from genome information
- 2) Mitsunobu Kamiya (Kobe Univ., Japan): Cryptic species of the red alga *Plocamium* inferred from the molecular phylogeny and physiological properties
- 3) Klaus Kubitzki (Uni. Hamburg, Deutschland): Major evolutionary advances in the history of green land plants
- 4) Masahiro Kato (The Univ. of Tokyo, Japan): Molecular phylogeny and morphological evolution of pteridophytes
- 5) Shu-Miaw Chaw (Academia Sinica, Taiwan): Molecular phylogeny of conifers and family diversification: review and perspective
- 6) Hiroshi Tobe (Kyoto Univ., Japan): Molecular phylogeny of the angiosperms

8月1日(日)

シンポジウム4 . 生物多様性情報学と植物分類学 (担当: 伊藤元巳・永益英敏)

- 1) Saw Leng Guan (FRIM, Malaysia): SEABCIN (South East Asia Botanical Collections Information Network)
- 2) Roemantyo (LIPI, Indonesia): Indonesia biodiversity information system
- 3) Motomi Ito (Univ. Tokyo, Japan): Integration of local flora information
- 4) Nozomi 'James' Ytow (Tsukuba Univ., Japan): Taxon name and taxon concept

シンポジウム5 . さまざまな植物群における種 (担当: 村上哲明・B. Tan)

- 0) Noriaki Murakami (Kyoto Univ., Japan): Introduction to Symposium 5, "The Changing Species Concepts in Plant Kingdom"
- 1) Benito C. Tan (National Univ. of Singapore, Singapore) and Brent D. Mishler (Univ. California, Berkeley, USA): The changing species concepts of mosses
- 2) Hiroshi Ishikawa (Chiba Univ., Japan): Genetic diversity in apogamous fern species of *Dryopteris erythrosora* group (Dryopteridaceae)
- 3) Xiao-Ru Wang (Inst. of Botany, Chinese Academy of Sciences, China): Hybrid speciation of a high mountain pine *Pinus densata*
- 4) Sizuka Fuse (Museum of Nature and Human Activities, Hyogo, Japan): Seasonal and ecological factors as isolation mechanisms between species of the genus *Heloniopsis* (Monocotyledonae: Melanthiaceae)
- 5) Ki-Joong Kim (Korea Univ., Korea): Facultative agamospermy and introgressive hybridization in *Taraxacum* (dandelions) species complex
- 6) Loren Rieseberg (Indiana Univ., USA): Integration of populations and differentiation of species

* 発表等の言語は英語です。

参加費など

* ポスター発表の申込は締め切りましたが、参加申込はまだ受け付けています。

参加費（5月17日以降） 一般：13,000円 学生：7,000円

懇親会費（5月17日以降）一般：6,000円 学生：4,000円

エキスカーション費 一般・学生：5,000円

参加申込方法

シンポジウムウェブページからの場合：<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsps/iapt2004>

郵送・ファックスの場合：申込票を送りますので、下記までご連絡下さい。

連絡先

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻内

アジアの植物多様性と分類に関する国際シンポジウム準備委員会

(喜多陽子)

電話：03-5841-2969 Fax：03-5841-4047

振込先

郵便振替：日本植物分類学会国際シンポジウム準備委員会

口座番号 00190-0-721603

銀行口座：三井住友銀行フラワータウン出張所

日本植物分類学会国際シンポジウム準備委員会 普通 3282958

宿泊（仮予約済みホテル）

ウィシュトンホテル・ユーカリ（285-0858 千葉県佐倉市ユ - カリが丘 4-8-1）

電話：043-489-6111 FAX:043-489-9898 ホームページ：<http://www.wishton.co.jp/>

*1人シングル1泊料金 5,481円 2人ツイン1泊 8,316円（歴博割引、税別；一定数を仮予約していますので、宿泊申込みファックス用紙（ニュースレター10号巻末）で各自、予約は早めにお願ひします。）

編集後記

汗ばむ日さえでてくる季節となりました。いかがおすごしですか？連休には、南会津へ行って参りました。浅草岳の美しいブナ林を眺めたのもいい思い出ですが、地元の方たちの山菜を採る姿の方がずっと印象に残っています。みなさん装備も姿勢も本格的。山と人の結びつきの深さが感じられた一面でした。

さて、今号よりミニ特集を組んでみました。同好会のこれからについて、短くても構わないので原稿をぜひお寄せ下さい。とくにアマチュアの方のご意見がいただけなくて困っています。よろしくお願ひします！

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学博物館

西田佐知子

電話：052-789-5764 ファックス：052-789-5896

Email: nishida@num.nagoya-u.ac.jp

ミニ特集：植物同好会のこれから

今号から3回にわたって、植物同好会の将来についてプロ・アマチュアのいろいろな方に語っていただこうと思います。みなさまからのご意見・ご感想をお待ちしています。(編集部)

植物同好会の活性化は可能か？

大阪府立藤井寺高等学校 織田二郎

福岡植物研究会発行の「福岡の植物」は2001年2月の第16号をもって廃刊となり、研究会も解散した。理由については「諸事情」としか書かれていないのでわれわれにはよく分からないが、全国的にアマチュアの植物同好会の活動が高齢化、不活発化しているという話はよく耳にする。高度経済成長期を終え、バブル崩壊を経て21世紀に入り、環境問題など自然とどう付き合っていくかが人間社会全体の関心事となっている今日、植物同好会は更なる発展を約束されているように思えるにもかかわらず、そうはなっていないようである。

何故なのだろうか？その理由は多岐にわたるのであるが、私が考えつく主な理由を少し挙げて今後の方策を考える一助としたい。1つめは、「自然」という言葉の独り歩きがある。植物であれ昆虫であれ、採集して触ってみて始めて理解が進むと思うが、採集＝自然の破壊という図式がまかり通っている。そのような大人の中で育った子供は草の中に足を踏み入れることを恐れ、チョウチョを気色悪がる。若い人が植物同好会に入らないのはこのことが背景にあるように思える。2つめは、プロと呼ばれる大学や研究機関の植物分類学者がアマチュアを次第に必要としなくなってきたことである。国内での新分類群の発見や地域フロラの解明は一通りの仕事を終え、プロの関心は分子情報を用いた系統進化の解析やまだ研究の進んでいない熱帯雨林のフロラの解明にシフトされている。今春の分類学会(広島大学)は200人を超す盛況だったそうだが、プロは若手研究者が続々と育って盛り上がっているのに比しアマチュア側は適切な目標を見つけあぐねているように思える。

このような考察から言えそうなことを挙げてみる。1つめは子供の教育である。学校に勤めるものは林間学校であれ、クラブ活動であれ、生物の採集を行うことの面白さを子供に伝えることである。地方の博物館はとりわけ重要な位置を占めているように思える。博物館の学芸員の普及活動での頑張りが決定的であろう。私の居住する大阪にも大阪市立自然史博物館があり、そこの例会で育ったアマチュアは多い。2つめは、アマチュア自身がテーマを持つことである。自然界はすべてが神秘であり、それを解明しようとする研究テーマは無限に存在する。アマチュアも今では豊富な文献の入手が可能になっている。ただ、植物の名を多く暗記しているだけでは発展性がない。ある意味ではアマチュアはプロから自立して自分で歩いていく楽しみ方を身に着けるべきだし、プロの側にもそういうアマチュアと共に何かを作りたいと願う人がもっと増えて欲しいと思う。そのような両者がかみ合うとき、新しい地平が開けると思う。

地方植物研究会・同好会の抱える問題を考える

人間環境大学 藤井伸二

各地で活動している地方植物研究会・同好会はどのくらいの数があるのだろうか。府県レベルのものはほぼ全国にあるし、それより小さな地域を対象に活動している会もたくさんある。また、植物に限定せず生物群を広く扱った生物同好会や自然保護活動関連の団体などを含めると、植物に関連した団体はおそらく星の数ほどもあるだろう。では、研究会・同好会は隆盛の時代を迎えているかということ、そうでもなさそうだ。実際、老舗の植物研究会・同好会のいくつかは、先細り気味だったり休会・閉会に至ったものもあると聞く。一方で、地方植物誌の出版をめざして活発に活動しているところもある。研究会・同好会の新設・解散は、いつの時代にも少なからず存在するし、それらにはそれぞれ固有の背景があるので十把一絡げの議論はできない。それでも私なりに気になることがあるので、少し考えていることを述べてみたい。なお、この文章は私見であり、大多数の植物研究会・同好会には当てはまらない可能性が高いことをお断りするとともに、このような文章を書く機会を与えてくださった編集幹事の西田佐知子氏にお礼申し上げる。読者の皆様には、このような文章を書く私の無礼をお許しいただければ幸いである。

レッドデータブックの編集に関わっていると、様々な形で植物研究会・同好会の方たちと接する機会がある。そのときに感じることは、植物についての深い知識と経験をお持ちの方が高齢化しているという事実だ。これは、裏を返せば世代交代が進んでいない（若い世代が育っていない）ということの意味する。もちろん、特定の分類群や特定の地域の植物についての知識や経験を持った新しい世代のリクルートはある。しかしながら、府県の全域や広汎な分類群にわたって全体を見渡せる能力や経験のある（あるいはそのような指向性を持った）若い世代は少ないように思う。広汎な知識や経験は一朝一夕には得られないから、高齢者にそうした傾向が偏るのは当然ではあるが、若い世代の指向性そのものの変化も背後にあるようで気がかりだ。研究会や同好会を取り巻く状況は時代とともに大きく変わるので、変化の是非自体を論じることはできないだろう。ただし、いくつかの研究会・同好会が斜陽化するなかで、その問題点や課題を整理することは必要だと感じている。なかなか文章にしづらい内容ではあるが、これまで在職した地方博物館で思い悩んできたことを文章化してご批判をいただくことにした。

プロとアマチュアの関係の崩壊？：従来の地域植物研究会・同好会の活動は地域的なものに限定されてはいたが、日本の植物相解明の基盤を担っていたと思う。それは、牧野富太郎の全国各地での植物収集を支えたのが地方の研究会・同好会であった事実を見ても明らかだろう。また、一例を挙げると、大阪に拠点を置いた近畿植物同好会の活動は京都大学の植物標本の収集や近畿地方の植物相の解明に大きく貢献している。こうした例は植物標本庫を持つ大学とそれと関係を持った研究会・同好会には必ずと言っていいほど見ることができる。鹿児島大学、金沢大学、信州大学、都立大学なども例に漏れ

ないだろう。このシステムには、プロとアマチュアの相互利益的な関係を見ることができる。地方のアマチュアは専門的な知識・情報を渴望し、それを提供できるプロが現地に招待される。その過程で、稀少な未記載種や隔離分布の発見と調査が促進され、日本の植物相解明が大きく進展することになった。しかしながら、現在この関係は崩れてきているように思う。日本の植物誌が多数出版され、専門的な知識や情報はよく普及してきた。それによって、プロを招待して教えを請うという必要性が減少したのがひとつの理由だと思うが、どうだろう。植物誌の完成は、過去のプロとアマチュアの努力の結晶であり、大きな成果であるのは言うまでもないが、逆に従来型のプロとアマチュアの間を崩壊させつつあるのではないか。仮にそうだとすれば、今後の新しい関係を模索すべき時期にきていると思う。

目標の喪失? : 地域植物研究の最大の目標は、地方植物誌の完成であったと思う。植物相と各種の分布の全容を把握する過程で、新分類群や新産地といった発見を積み重ねていくことは、それに携わるものにとって大きな喜びであったと思う。また、分布パターンの知見を集積することで植物地理学的新事実を見いだすことは、全国的な植物相の解明にも大きく貢献する。当然のことだが、地方植物誌完成のためには膨大な基礎研究が必要であり、研究会・同好会の多数の会員が協力して活動を行う大儀となり得たであろう。しかしながら、地方植物誌が完成した府県では、これに替わる新たな大儀を見いだせずに活動の求心力を失いつつあるのではなかろうか。実際、植物誌出版（改訂版出版も含む）を目標にした近年の研究会（例えば神奈川県、千葉県、愛知県、兵庫県）は、非常に活発な活動を行っている。植物誌編集に限らないが、会全体の活性を支えるのは強力な大儀の存在があると思う。衰退しつつある研究会・同好会では、その模索や会員間での共有を積極的に進めることが必要ではないだろうか。地方植物誌が完備されている地域でも、改訂版の作成、ため池の調査、塩湿地の調査、社寺林の調査、絶滅危惧種の調査など、やるべきことは山積していると思うのだが。

権威主義と無責任状態 : 会の運営がこのような状況になれば未来はない。けれども、老舗の会や大所帯の会になるほど無意識に陥りやすい気がする。運営者達の会議（運営会議や幹事会など）において、年長者の意見がたいした吟味もなくそのまま通ってしまうようであれば問題だろう。また、建設的な提案がなされても、結局何が決まって何が決まらなかったかわからないままに会議が終結したり、誰がどうして決めたのかわからないままに役員の仕事分担が割り当てられたりすれば重傷だ。議事録すら存在しないのでは、会議の体をなしていない。無責任な会議ほど会の活性を奪うものはない。能力のある役員の求心力を失うことは会にとって大きな損失で、有能な人材の流出は組織の衰退を加速する。また、リクルートを目指す若い世代は、そのような雰囲気には敏感に反応すると思っていだろう。しかし、実際には意外に根が深くて気づかないところまで食い込んでいるような気がする。役員に適当な人を推薦しても、年長者から「若すぎる」なんて答えが返ってきたりするなら黄信号かもしれない。

積極性の希薄と二極分化? : 研究会・同好会で指導をしていると、「私はアマチュアですから ...」あるいは「私は専門家ではないので ...」と言ってそれ以上の解説を拒否されることがある。例えば、どの学名を採用するかということに関してそれぞれの研究者の見解の相違を解説すると、上記の返答をされたあげくに「で、どちらの学名を使ったらいいんですか?」という指示を仰がれる。それまで15分近くも説明してきたことへの徒労感が積もる。こうした逃避は「アマチュアである」ということがその原因ではなく、学問的な問題に対する積極性の希薄性だと思うのだが、どうだろうか。そのような問題の延長上に、「教える側」と「それを享受する側」の二極化・固定化があるように思えるのは考えすぎだろうか。「植物の名前は先生に教えてもらうもの、決めてもらうもの」という立場と「名前を教える」立場の二極化は、サービスの搾取と提供という構図を意味し、これが特定の人材に固定化すると常に搾取される側はたまったものではないし、新たな人材の育成も阻害される可能性が高い。会を維持するには、学問的意識の低い人たちをある程度満足させつつ、特定の人材に負担を集中させず、なおかつ新たな人材を育成する必要があると思う。今の時代、このような配慮は会の運営に必要になってきていると思う。

サークルの多様化と氾濫: 今や、植物学に限らず様々な分野のサークル活動が各地で無数に行われている。研究会的な性格のものから園芸、山野草、ハーブといったものや自然保護あるいは農耕体験などにも植物と関連した活動が展開されている。以前のように植物に関する情報やそれを共有できる仲間には乏しくてそれらを「渴望」していた時代ではなく、無数に氾濫するものの中から「選ぶ」という時代になっているのかもしれない。受け身の立場の会員を考えた場合、どれだけのサービスを得られるかが重要で、研究会・同好会もそうした選択対象の一つとして受け止められているとすれば不幸なことだ。サービス偏重に陥れば、前述の「積極性の希薄」を助長するだけでなく、アカデミックな要素が乏しくなる危険性がある。そもそも、地域植物の探求が活動中心であるような研究会の場合、サービスというものが馴染まないかもしれないのだが、すべての会員や参加者にそのことが必ずしも浸透しているとは限らない。情報やサービスの多様化と氾濫の中で、研究会としてのアイデンティティを保ちながら活動を続けるにはどうしたらよいだろう。また、新しい会員のリクルートと人材の育成を円滑に行うにはどうしたらよいだろう。一方で、絶滅危惧種の保全面からの社会的要請は大きく、これに応えていくことが研究会・同好会の新たな社会的役割であろう。けれども、研究会・同好会にはそれぞれ固有の歴史と背景があり、それらを抜きに目標や未来像を描くことはできない。各個人の強い思い入れもあるだろう。難しいところだ。一方で、絶滅危惧植物などほとんど相手にされなかった20年前のことを考えると、研究会・同好会を取り巻く世の中は激変している。こうした変化を踏まえつつ、それぞれの研究会・同好会の灯をともし続けていく努力が必要な時代なのかもしれない。

連絡員からときどき便り

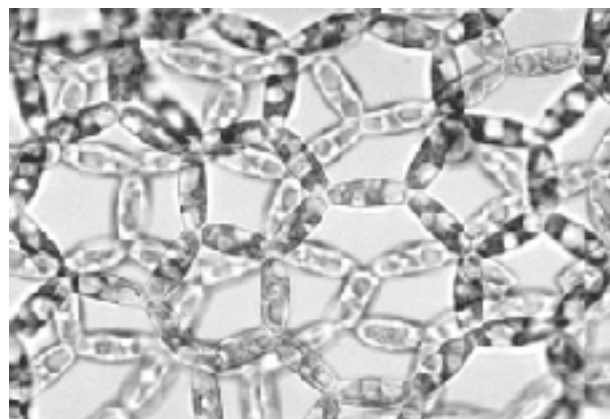
藻（も）便り・2・

金沢大学大学院自然科学研究科 石田健一郎

私が通う大学は石川県金沢市にある。近年、野菜や肉などのブランド化が進んでいるが、金沢を中心とした野菜のブランドに加賀野菜というのがある。金時草、源助大根、へた紫なすなど14品目の金沢産の野菜のことで、その中に加賀蓮根とよばれる蓮根が含まれている。節間が短く肉厚なのが特徴で、身が柔らかく舌ざわりが良いと好評らしい。この加賀蓮根、金沢市北部のちょうど北陸自動車道の東金沢IC付近から海へかけての低地の所々に広大な蓮根田があり、そこで栽培されている。今（4月下旬）はちょうど蓮根田へ水を入れ種蓮根を植え付ける時期で、どの田にも浅くなみなみと水が張られる。これから夏にかけ蓮がどんどん生長し、最後には水面から1メートル程の高さに葉がびっしりと広がり田の面積を被いつくす。「一面の蓮」は普段あまり見ることのない風景なのでちょっと感動ものである。

ところで、私が毎朝通勤路にしているルートの途中に、山沿いの小さな集落がある。ちょっと昔の農村的雰囲気、なかなか趣のある集落だ。その一角に小さな蓮根田が一つだけある。前述の加賀蓮根の生産地とはかなり離れているので、何故こんな所に？と思うが、おそらくおばあさんが一人趣味でやっているのだろう。ある朝、この小さな蓮根田の水面が真緑に色づいていることがあった。藻類を研究している者の性が、水の色が変わっていると気になってしょうがない。思わず車を止めて近寄ってみると、アオミドロのような緑藻に見えるが何となく雰囲気が違う。触ってみると少しざらざらしてアオミドロとは違う。手に取ってよく見ると小さな網目がたくさん見える。というわけであの緑色の正体はアミミドロであることがわかった。私の「お気に入り」の一つである。

アミミドロはアオミドロと一字しか違わないが、実は互いに全く異なる緑藻なのである。アオミドロは、円柱状の細胞が一直線に連なった分枝のない糸状藻で、陸上植物の直接の祖先となったシャジクモ類などと同じ系統に入る緑藻としてよく知られて



アミミドロの若い群体の一部。

(Algal Photography 日本藻類学会フォトCDより改変)

いる。一方、アミミドロはソーセージ状の長細い細胞が網目に繋がって(図参照)全体が網かご状になった緑藻で、陸上植物につながる系統とは別の系統に入る。ところで、よく成長したアミミドロの群体を採集して顕微鏡で根気よく観察すると、どうやってこの網目が作られるのを見られることがある。アミミドロは一つの細胞が網目の一辺を構成しており、大きくなると細胞の長さが数ミリにもなり肉

眼でも容易にわかる。この十分に成長した細胞は多数の核を含む多核細胞で、これが成熟すると細胞壁の中で分裂が起こり、一個の核と2本の鞭毛をもつ遊泳性の細胞がたくさん作られる。この遊泳性の細胞はしばらく親の細胞壁の中を泳ぎ回っているが、やがて鞭毛を失い、5から6細胞が一つの網目を作るように互いに接着して、一つの小さな細長い網目状の娘群体を形成する。つまり、親の一つの細胞の中に次の世代の網目状群体全体が作られるのである。あとは各細胞が核分裂を繰り返して成長し、親の細胞壁を破り、全体で数十センチの網かごにまで大きくなるのである。

さて、あの通勤路の途中にある小さな蓮根田では今年も水入れと種蓮根の植え付けが終わり、今ちょうど小さな蓮の葉が伸びはじめているところである。まだアミミドロは増えていないようだが、また5月の中旬から6月上旬になればブルーム (bloom = 開花に例えて藻類が増え水の色が変わることをいう) が見られるにちがいない。また網目状群体が生まれる様子を顕微鏡で見るのが楽しみである。

春のこの時期は、蓮根田だけでなくふつうの田んぼにも水が入り、水面が様々な藻類のブルームで色づく。これは蓮や稲が生長し太陽の光を遮るようになるまでの短い期間のことではあるが、桜の花が満開になるように藻類も「満開」になるのである。花見ならぬ「藻見」を楽しんでみてはいかがだろうか。

蓼食う虫便り・2・

東北大学 米倉浩司

昨年の6月後半から7月にかけて、ネパールのムスタン地方とシッキムの植物調査隊に参加する機会を得た(調査の詳細は Newsletter of Himalayan Botany no. 33: 1-6 および 7-15 (2004)を参照されたい)。ムスタン地方はヒマラヤ山脈の北に位置する乾燥した高原地帯で、風土は北隣のチベットと大差なく砂漠のような荒涼とした風景が広がるのに対し、シッキムはモンスーンがもたらす雨のためヒマラヤ地域随一の植物の多様性を誇る。当然のことながら、生育する植物も全く異なっている。

ムスタンでは2週間の調査期間中9種のタデ科植物を見たが、特に最奥のキャンプ地から3時間近く慣れない馬に乗った末に(国境近くでのキャンプが禁じられているために移動には馬を使った)チベットとの国境からあと3 km という所で *Knorringia sibirica* ssp. *thomsonii* を採ることができたのは収穫であった。この植物はチベット高原からパミールにかけての中央アジアの乾燥した高原地帯に固有であり、その分類学的位置は未だに定かではないが、ソバカズラ属 *Fallopia* に近いものとする意見が有力である。この他にも、ムスタンではムカゴトラノオ *Bistorta vivipara*、エゾノミズタデ *Persicaria amphibia*、チシマミチヤナギ *Koenigia islandica* やミチヤナギ *Polygonum aviculare* のような北半球に広く分布する種も見られたが、ネパールではこれらの種の分布は乾燥した北西部の高地に限られており、東部では高山帯でもほとんど見ることはできない(ムカゴトラノオは典型的

でないものが他の地域の高山帯にも広く生育しているが)。

ムスタンの調査を終えて次に移動したシッキムは、中印紛争後は政治的理由により長く外国人の入域が制限されており、日本の調査隊も久しぶりに入ることが許された地域である。私は極めて残念なことにスケジュールの都合上4日間しか調査に加われず、高山帯の下限にすら達せずに泣く泣く引き返さざるを得なかったが、その期間だけでムスタンを上回る13種のタデ科植物を採集することができた。この13種はいずれもネパールにも分布しているが、ムスタンで見た9種と共通する種は無い。写真に示した *Bistorta emodi* は、私の行った一番奥のキャンプ地(標高3200 m)付近の沢沿いの岩上に生育するイブキトラノオ属の植物で、木質の匍匐茎によって岩上を覆い、深紅の花穂を林立させていた。イブキトラノオ属は太い根茎が発達して根出葉を持つ、と前回の便りに書いたが、ヒマラヤには3種だけ木質の細長い匍匐茎を持って根出葉の無い例外が知られており、本種もその1つである。イブキトラノオ属の属するイヌタデ連 (Ronse Decraene and Akeroyd 1988. ただしソバ属を除く)には木本の種はこの3種以外には殆ど無く、このような生活形がどのように進化したのかという点には大いに興味のある所である。

他の隊員の話によると、ここからさらに2日行った先の峠付近にセイタカダイオウ *Rheum nobile* の群落があったということである。行きたかった……………。



Bistorta emodi (シッキム北東部の標高3200m地点にて撮影)

入会申込、住所変更、退会届、会費納入、購読
申込などは下記へご連絡ください。

〒980-8578 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉
東北大学大学院生命科学研究科生態システム生命
科学専攻

日本植物分類学会 横山潤（会計幹事）

Phone:/Fax: 022-217-6689

E-mail: jyokoyam@mail.tains.tohoku.ac.jp

会費：一般会員 5,000 円、学生会員 3,000 円、

団体会員 8,000 円

郵便振替 00120-9-41247

平成 16 (2004) 年 5 月 14 日印刷

平成 16 (2004) 年 5 月 24 日発行

編集兼 名古屋市千種区不老町

発行人 名古屋大学博物館

西田佐知子

発行所 つくば市天久保 4-1-1

国立科学博物館筑波実験植物園

日本植物分類学会